
お願いです、忘れて下さい

やしろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お願いです、忘れて下さい

【Nコード】

N3434H

【作者名】

やしろ

【あらすじ】

貴方に出逢わなければ、もっと生きたいなんて思わなかったのに。

舞散る花弁の中に

時は四月の中旬。もう、桜が散り始める時季だ。

桜とは、なんて早く散ってしまうのだろう。直登は、教室の窓からぼんやりと外を眺め、ふとそんな事を思った。

「ナオ」

不意に背後から呼ばれ、振り向く。誰か、なんて見なくても分かる。

「何？充」

新井充。直登のクラスメイトであり、幼少期からの幼馴染みだ。

「何、じゃなくて。授業もう終わってるんだけど？」

「え、嘘」

「ほんと。いつまでそうやって座ってるつもり？」

充が呆れたように溜息を吐く。

もう授業が終わったという事は、今は昼休み。

こんな事してる場合じゃない、早く弁当食べないと。充はそう言っ
つて、直登を急かした。

「あれ？」

直登は、こて、と首を傾げる。

「なんで外に出んの？」

弁当食べるだけなのに。

いつの間にか、充は外へと直登を連れ出していた。ぶわっ、と視界を遮るように桜が舞う。

「桜、綺麗だったから、たまには外で食べようかと思って」

につこりと、女子が見ていたらきゃあきゃあ騒ぎそうな顔で、充は笑った。

充は、昔から格好良くて、よくモテた。直登も別にモテなかった訳ではないが、充程ではない。どちらかというと、可愛い部類なのだ。

「綺麗だろ？桜」

顔が良い上、気遣いまで出来る充を、直登は本当に良い友人だと思っ。

「うん。でも、弁当に花弁が入っちゃいそうだね」

「あ、確かに」

直登の一言で、二人は同時に吹き出した。

笑いながら、こんな幸せな日々がずっと続けばいいのに、と思う。こんな事、普通に生活していたら考えもしないのだろうけど、直登は思わずにはいられなかった。

こんな風に、学校に来て、充と笑い合っつて。特別な事なんていない。ただ、普通の日常を送る事が出来れば、それだけで良かったのに。どうして、俺の日常を…幸せを、神様は奪ってしまったのですか？

直登は、半分しか食べていない弁当の蓋を、そっと閉めた。

「?どうした、もう食べないのか?」

充が、不思議そうに直登の顔を覗き込む。充のこういう、小さな変化にも気付く所はとても良い所だと思うが、今回ばかりは厄介だ。直登は苦笑を浮かべた。

「ああ、今日はあんまりお腹減ってないんだ」

そんな、見え透いた嘘を吐く。けれど、充はその嘘に気付いているのかいないのか、「そうか」としか言わない。直登は小さく息を吐いた。

「直登、大事な話があるの」

母親にそう言われたのは、つい先日。普段通り、学校へ行った帰りだった。改めてそう言われると、なんだか凄く、心配になる。

何?離婚?母の口から告げられる前に、そう聞いてしまおうかとも考えた。

「この前、あなた検査受けたでしょう?」

検査?ああ、確かに受けた。ずっと体調不良が続いていて、病院

へ行つた時に。

「それが？」

「……………」

母親が、言い難そうに口を嚙む。なんだ、何なんだ。妙にどきどきする。これが、何かへのときめきか何かからくる動悸なら良かったのだけれど、生憎、どう考えても不安からだ。

「何？すつげえ重い病気でしたー、とか言わないよな？」

沈黙がどうも痛くて、わざと茶化すような口調で言ってみる。しかし、反応はない。

直登がいい加減痺れを切らした頃に、母親は漸く口を開いた。

「…あなた、癌なんですって」

「は…？」

なんだ？今、何て言った？

「そ、それは…何かの冗談…」

「冗談でなんか、こんな事言えないわ」

厳しい口調でそう言う母親の目には、微かながら涙が溜まっている。それが、今の話を本当だと決定付けていて、直登は生唾を飲み込んだ。

「で、でもさ、癌って言っても抗癌剤治療とか、へたすりゃ手術でもすれば治るだろっ？」

それは、質問というよりも哀願に近かったかもしれない。癌？どうして俺が。そんな思いが、直登の脳内を駆け巡った。普通通り…そう、本当に普通に、高校生活を送って来たのに。

「転移…してて…」

ぼろぼろと、堰を切ったかのように溢れ出す涙。母親が泣くのを見るのは、これが初めてだった。

もう、何も言わないで。この先、言われる事は分かってしまった。

「…俺、死んじゃうんだな」

口に出して、やっと実感が湧いた。いや、湧いてないのかもしれない。まだどこかで他人事のように考えているのかも。

「そっか…」

涙が出るでもなく、ただ、呆然とするだけだった。

別に、これが俺の運命だというのなら、逆らう気はない。しっかりと受け止めるよ。だけど、どうしても気になる。

神様、もし本当にいるのなら、教えて下さい。どうして、俺だったのですか？

一日の授業を終え、直登は帰るべくスクールバッグを背負う。あの、学生特有の背負い方。

「ナオ、今日はどこか寄る？」

充が、スクールバッグを肩に掛け、歩いて来た。そんな姿も相変わらず様になっていて、直登は少し羨ましく思う。

「ごめん、今日は用事あるから先に帰るわ」

そうか。充がそう言うのを聞いて、教室を後にした。

ふと。桜の木を見上げると、もうほとんど花は付いていなかった。今年は例年より暖かかったから、散るのが早いらしい。直登は、はあ…と深く溜息を吐く。

この桜が全て散る頃に、俺の命は終わってしまう。この桜と同じように、散ってしまうんだって。

直登は嘲るように笑った。どうして、手遅れになる前に気付かなかったんだらう。今更そんな事思っても遅いのだけれど。

ぴと、と直登の小さく小高い鼻に、一片の花弁が乗った。こんなに舞い散っているのだから、きつと頭の上などにも乗っているのだろう。直登は、その薄茶色の髪を軽くはらった。

「?」

ふと、何かが耳に届く。何だ?音のような、歌のような。綺麗で楽しげで…今の直登には程遠い感情。

じつと、耳を澄ます。だんだん大きくなって行く…歌。そうだ、これは歌。陽気な音楽。

「…誰だ?」

耳から、今度は目に意識を集中する。向こうから、こちら側。校門の方から、校舎の方へ。一人の青年が、舞い散る桜の中を歩んできた。

そよそよと優しい春風に、無造作にセットされたオレンジ色の髪が靡く。耳にはいくつもピアス。適度に着崩した制服は、直登達と同じではない。

誰だろう。見覚えがない。転校生だろうか。直登は暫くの事そうしていたようで、視線に気付いたらしい青年がこちらを向いた。無意識に、ドキリとする。

視線が絡み合い、数秒。形の良い唇が弧を描き、青年はとても綺麗に微笑んだ。

この時貴方に出会わなければ、未練なんて抱かなかった。もっと生きたいなんて思わなかったのに。

お慕いしております

相変わらずぼんやりと外を眺める直登。ただひとつ違うのは、ここが学校の教室ではなく病院の病室だという事。

学校の桜はもうほとんど散ってしまったけれど、まだこの桜は咲いている。それが、どんなに直登の心の支えになる事か。

はあ…と、もう幾度目か分からない溜息を吐く。

「…常磐君、か…」

病室に自分一人しかいないのを良い事に呟いた名前。

先日桜の中で見た、歌の上手い青年、常磐燐。彼について知っているのは、その名前と、直登のクラスに来た転校生だという事。他は何も知らない。その名前だって、充から聞いたのだ。

学校に行きたい。彼に、もう一度だけ会いたい。そして、歌声を聴きたい。

そんな些細な願いを胸の奥にしまう。願っては駄目だ。諦めがつかなくなる。ただ、自分の身に降り掛かる出来事を受け止めればいい。足掻いたってどうしようもない。惨めになるだけだ。

「望んじゃ、駄目だ…」

直登は、そっと目を閉じる。桜が散るのを見たくないから。

ナオ、随分長い事休んでるけど、風邪そんなに酷いのか？

充から送られて来たメールに、どう返信しようか悩む。

風邪だと言って誤魔化すのは、もう限界か。だけど、真実は言いたくない。

「直登、充君達に本当の事言わなくていいの？」

どうせ、いつかはバレるのよ。母親が顔を歪めて言う。

そういえば最近、痩せた気がする。苦労してるからか。させているのは、他でもなく自分。

「うん。じゃあ、本当の事言う」

騙すのも、もう限界だろうから。

直登は微笑む。それは、とても頼りのないものだった。

実は俺、癌なんだ。もうすぐ、死ぬらしい。

そう、簡潔なメールを充のアドレスへ返信した後、直登の携帯に彼からの返事はなかった。

きつと、冗談に思われたに違いない。実際、自分が充の立場だったら、たちの悪い冗談を吐くなど怒っていただろう。

直登は、自嘲的に笑った。

その日の夕方。直登の病室は初めて賑わいを見せた。事実を知ったクラスメイトが見舞いにやって来たのだ。

「久遠、お前なんで今まで言わなかったんだよ……」

「嘘でしょ？もうすぐ死んじゃうなんて……」

賑わいとは言っても、もちろん明るいものではなく、悲しみに暮れる懺悔だったが。

それでも、こうして自分の為に悲しみ、泣いてくれる人達がいる。そう思うと、なんだか妙に穏やかな気持ちになれた。

「…充、ごめんな」

何が、「ごめん」なのだろう。

「なんで…謝るんだよ」

案の定、充にも聞き返される。

どうして謝ったのか。そんな事、本人の直登にさえ分からない。これまで迷惑を掛けた事か、恩返しをする前に死んでしまう事か。

「よく、分からないや…」

全て合っているようで、全て違っていているような。

分からないけれど、思わず彼への謝罪の言葉が零れた。

「直登」

充達が帰った後、どうやら寝てしまっていたらしい。

母親の声で目が覚めた。

「直登、お客さんよ」

病院でお客さんという表現は間違っているような気もしたが、直登はそこに触れず、体を起こした。

そして、目を見張る。

「くんばんは」

挨拶をする“お客さん”は、相変わらず綺麗な声をしていた。

「こうして、ちゃんと話するのは初めてだよな？」

ああ、初めてだとも。それどころか、こうして顔を見るのでさえ、
今回が二度目だ。

なんで彼がここに。直登は寝起きのせいで働かない頭で、必死に
考える。

そんな様子を見て、少し可笑しそうに。常磐燐はふわりと微笑ん
だ。

「俺の名前、分かる？」

燐の問い掛けに、直登はゆっくりと頷いた。
常磐燐。 充がメールで教えてくれた。

「常磐君、だよな」

「常磐で良いよ。なんなら燐でも」

そう言って笑う彼の顔は、やっぱりふわりと柔らかい。

「じゃあ……とき、わ？」

燐。いきなりそう呼ぶのは気が引けて、直登は小さく呟いた。
燐が可笑しそうに笑う。

「なんでクエスチョンマーク付き？」

まあいいけど、と笑いを抑えた。

「久遠直登君、でいいんだよな？」

「うん」

「何て呼べばいい？」

「…何でも、いいよ」

どうせもうすぐ俺はいなくなる。それまでの短い間くらい、何とでも呼ぶがいい。

「じゃあ、直登って呼ぶ。いい？」

何でもいって言ってるのに。

確認するように聞いて来る燐に、小さく頷いた。

「あ、そうそう。これ」

そう、思い出したように燐が差し出したのは。

「…マリーゴールド？」

白と黄色のマリーゴールド。

直登は、首を傾げる。

「これ、俺に？」

「直登以外に誰がいるんだよ」

それもそうだな、と納得して、淡い色のその花を見つめた。

「本当はオレンジあたりにしたかったんだけどさ、季節外れだからこの色しかなかったんだ」

そう言って、残念そうに肩を竦める。

燐はそう言うけれど、直登はその淡い色が何とも気に入った。

「いや、凄く綺麗だ。…ありがとう」

きっとオレンジや赤い色をしたマリーゴールドも綺麗なのだろうけど、このくらいの方が馴染みやすい。

「マリーゴールドの花言葉、知ってる？」

突然の質問に、頭を振る。^{かぶり}自慢じゃないが、花言葉なんて考えた事もない。

「生きる、友情」

生きる。友情。

その二言に、酷く涙が出そうになった。鼻の奥が、つんと痛む。

「じゃあ、今日は帰るか。また明日、もっとたくさん話しような」

ひらひらと手を振る燐につられて、直登も点滴の管が繋がる手を振った。

また明日。また明日、話をしよう。

マリーゴールドの花言葉は、生きる、友情。それともうひとつ。
可憐な愛情。

あの花が散るまでは

次の日も、燐はやって来た。昨日とは違い、直登達の学校の制服を着ている。

「制服、届いたの？」

「ああ」

そう頷く彼は、そこら辺の生徒よりもそのブレザーが似合っていて、直登は感嘆の声を漏らす。

「似合うな。充と同じくらい」

その言葉に、燐は吹き出した。

よく笑う男だ、と、直登は思う。

「そこはさ、お世辞でも一番似合うって言うてよ」

「…一番、似合う…？」

再び爆笑。ここが病室だという事を忘れているんじゃないかといつくらい、大声で笑う燐。

おかげで、笑う時に手で片目を隠す、という癖を発見した。

「直登ってば、いつもクエスチョンマーク付けんのな」

「そつ？いつもじゃないと思うけど…」

直登はうーん、と首を傾げる。燐の笑いのツボが分からない。

「…ああ、確かに」

急に納得し出す燐に、直登は更に首を傾げた。

「いつも、なんて言える程、俺は直登の事知らないなあと思って」

その言葉に、ズキリと胸が痛む。

出逢ってわずか。燐は直登の事をほとんど知らない。直登も、燐の事を知らない。

分かっていた。最近まで二人は顔も名も知らない他人だったって事。そんな事、分かりきっていた。

それなのに、彼の言葉に酷く傷付いている自分がいる。

「直登」

名前を呼ぶ声に、顔を上げる。

相変わらず綺麗な声だ。勇ましくて、麗しい。劇団なんかに入ったら、さぞかし活躍するだろう。

直登は、燐の目を見据えた。

「直登の事、聞かせて」

「え？」

「誕生日、血液型、好きな食べ物に、好きなテレビ番組。何でもいい。どんなに些細な事でも、聞かせて？」

ぎゅっ、と、直登の左手を燐の両手が包む。温かくて大きな手のひらに、思わず安心感を覚えた。

「出会うのが遅かった分、たくさん話を聞かせて。俺達の空白の時間を埋めよう」

つり目で、だけどこか優しい瞳。吸い込まれてしまいそうな。なんだか恋人に言う台詞みたいだ。そう思いつつ、直登は自然と顔が緩むのを感じた。

窓際で咲き誇るマリーゴールド。

桜の花は、もうほぼ散ってしまったけれど。神様、どうかお願い。この花が散るまで。そう、あと少しだけ、俺に時間を下さい。

時間が、もう無いのです

桜の木は若葉をつけ始め、時はもう5月となった。

ゴールデンウィークのせいか、最近は病院へ来る見舞い客が多い。そうは言っても、直登はもう一人部屋である為、とくに接触はないのだが。

ぼんやりと外を眺めると、青く澄み渡った空が瞳に映る。

鳥のように、空を飛べたら。初めて、そんな事を思った。

飛べなくても、地を歩けるのだからいいじゃないか。今までは、そう思っていた。けれど、もう歩く事は出来ない。

それならいつそ、飛びたい。飛んで、彼の元へ行きたい。そうしたら、落ちて死んでしまっても構わないから。

「ナオ」

聞き慣れた声に、顔を上げる。

「大丈夫か」

大丈夫な訳ないじゃないか。そう言いたくても、掠れた声しか出ない。呼吸器が苦しいって、入院して初めて知った。

「み、つる……」

「何？」

なんて、穏やかな声を出すんだろつ。

「外、行きたい…」

「分かった」

充はやんわりと微笑んで、直登を車椅子に座らせた。

「寒くないか？」

「う、ん。大丈夫…」

薄い部屋着にカーディガン一枚だけでも十分な程、外は暖かかった。

中庭では、小さな子供達がはしゃぎ回っている。その中には、手術を終えて退院間近な子もいれば、直登のように先が短い子もいるだろつ。

どうして。そんな事を思ったらきりがないけれど、思わずにはいられない。

どうして、皆普通に生まれて来て生活しているのに、こんな医療施設で生活を強いられる子供が出来てしまうの。

決して生んだ親を責めてる訳でも何でもない。もしかしたら、この生活が普通だと思っっている子供だっているかもしれないのだから。ただ、それが無性に切なく思えた。

なんだろう。腕にさらさらとした何かが触れる。

不思議に思っけて目を開けると、直登のベッドに腕と頭を乗せて、眠っている人。腕に触れていたのは、そのオレンジ色の髪だ。

「…んあ…」

オレンジ色の頭がゆっくりと持ち上がる。

「おはよう、常磐」

「ん。おはよ、直登」

寝起きの為か、いつもとは違う表情でふにやりと笑う燐。
そんな彼が、愛おしくて堪らない。この感情は何なのだろうか。
知ろうとは、思わない。知っても、きっと無駄だから。

「今日は？何してたの」

「うんと…。充と散歩、行ってた」

掠れる声で、それでもなお、しっかりと答える。この幸せな時間を無駄にはしたくない。

「充、って…」

「新井充。同じクラスだろう?」

「ああ、違う。そうじゃない」

燐の言葉に首を傾げる。

「充とは、友達?」

「?うん、友達」

幼馴染みでもあるけれど。

何が何だか分からないまま答えると、燐の真剣な瞳と目が合った。

「じゃあ、俺は?」

「常磐?」

「俺は、何?」

何?って、そんな事聞かれても。

「俺は友達、って思ってるけど…」

“俺は”という所が、妙に虚しい。燐が自分をどう思っているの
かなんて知らないから、あまりでしゃばった真似は出来ないから。

「俺は、さ」

ドキドキする。友達否定されたらどうしよう。

「友達じゃ嫌だ」

「え」

どういう事？そう聞く前に、唇に何かが触れた。

「友達以上じゃなきゃ、やだ」

ゆっくりと離れて行く薄い唇とか、いつもとは違う子供っぽい口調とか。全てがどうしようもなく愛おしく思える。

好き。そう、そんな感情だ。

「俺は、直登の事が好き」

隣の言葉に、心臓がバクバクする。

何？それは、自分と同じ気持ちだと思って良いのか。

赤い顔を隠すように俯くと、点滴の管が目止まった。

途端に、我に返る。

「…「じゅめ、ん…」」

そう言うのが精一杯だった。

「なお…っ」

「「じゅめん」

名前を、呼ばないで。心が揺れてしまう。

俺にはもう時間がないんです。だから、ごめんなさい。

お願いです、忘れて下さい

神様なんて嫌いだ。

あのマリーゴールドが散るまでは。そう祈ったのに、どうして。

「直登っ」

「ナオ…っ」

機械音がやけに大きく響く病室の中で、幾つもの聞き慣れた声が耳に届く。

その代わり、目にはほとんど何も映らない。酷く霞んだ視界が映すのは、綺麗に咲き誇るマリーゴールド。

「…とき、わ…」

そのひとつの名前を呼ぶのに、結構な時間が掛かった。

「常磐？常磐に会いたいのか？」

こくりと頷く。いや、頷いたつもり。実際はちゃんと頷けていないのかもしれない。

早く。この目が何とか見えるうちに、早く。

「直登」

綺麗な声が、名前を呼んだ。どこか震えている気がするのは、自

惚れなのだろうか。

「」

「直登…、聞こえないよ…」

燐が、直登の口元に耳を寄せる。さらさらのオレンジ色の髪が触れて、くすぐりたい。

「り、ん…」

最期くらい、名前で呼んでも罰は当たらないよね。

直登は、震える声で愛しい人の名を呼んだ。

ああ、淒く眠い。もう眠ってしまいたい。

「何？直登」

優しい声。この声が好きだった。

眠い。けど最後に、これだけ言わせて。

「…燐、大好き、だよ…」

そつと握った燐の手は、涙が出るくらい温かった。

俺の、愛しい人。

その顔も、性格も、声も。全てが大好きでした。

貴方が俺を好きだと言ってくれた時、どうしようもなく嬉しかった。本当なら、あの時にこの気持ちを伝えられたよ。だけど、俺にはもう時間がなかったから。

最期に気持ちを伝えたずるい俺を許して下さい。

燐。 お願いです、俺の事は忘れて下さい。

俺と貴方の短い時間は、俺がずっと覚えてる。忘れろって言われ
ても、絶対忘れてなんかやらない。

だから、燐。 お願い。俺の事は忘れて、幸せに生きて下さい。

俺を好きになってくれて、ありがとう。

何も返せなくて、ごめんなさい。

大好きです。さようなら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3434h/>

お願いです、忘れて下さい

2010年10月12日02時55分発行